

紹介

ローゼンベルグ著『廿世紀の神話』

Alfred Rosenberg, Der Mythos des 20.

Jahrhunderts, 1937 110. Auflage

ナチス登場に先立つ三年その初版が上梓され數年前に既に發行五十萬部を突破したといふ此の書物の今更紹介でもないかも知れないが、有名過ぎる爲に却つて親しく緋かれず印象的な著題の聯想だけで始末されてゐるやうな憾みもないと思はれるので、ナチス人口政策の世界觀的背景をなす本書中の人種闘争史觀ともいふべき部分を中心にその一端を紹介してみようと思ふ。

一
惟ふにナチス人口政策の世界觀的前提と考へられるものは、廣く近代合理主義的精神に對する反省運動として、或は新しい心理學に或は晩近の哲學的人間學の如き思潮の中にも視ふことができ、そして人間性の本質を明るい意識の中によりも寧ろ暗い本能的自然の中に探ねようとする之らの傾向には近代文化への自省として敬意を表すべきものが尠くないが、併し世界觀として本格的な結構を有つにはやはり文化哲學乃至は歴史哲學の形を取らねばならない。十九世紀文明に對する最も手酷い批評家であつたニ-

チエの再吟味がナチス運動と併行して獨逸に隆盛を極める所以であるが、ローゼンベルグの提案する新しい歴史解釋も亦この先蹤ニチエの文明批評の態度を繼承するものの一つと見てよい。(勿論だからとて私は別にローゼンベルグを學者としてニチエと同じ水準に立つてゐると考へるわけではない。)

著者ローゼンベルグの新しい歴史解釋とは血と人種と民族とを基とした人種闘争史觀とも稱すべきもので、特定の文化類型は特定の人種的類型に固有なものであると考へる點に於ては人類文化の普遍的で合法的な發展を説く皮相で圖式的な所謂文化史觀の水準を遙かに抜いたものといつてよい。諸文化類型の變遷を社會の階級的構造から説明したものは唯物史觀であるが、特定の文化類型は單なる階級闘争の所産ではなく支配する人種そのものの興亡と形影相伴ふものと考へる點に於ては所謂階級闘争史觀の構想からも更に竿頭一步を進めようとするものといつてよい。それは歴史の中に血と人種とに固有な生來の性格價値の闘争を見ようとするもので、嘗ては世界のキリスト教化運動として又近くは人類のフマニジールンクの夢として登場した様な萬人の魂の超人間的な共同の思想の如きは著者によれば人間生命の基礎から遊離し孤立化した自我のみの抱き得る幻想に過ぎない。本當の文化價値といふものは特定の類型を有つたものでなければならぬ。従つてまた特定の類型的生命を離れたものではないといふのが著者の力説する根本の主張であるわけだ。極端な個人主義と極端な普遍主義とは共に表裏一體をなすもので、そのやうな無際限な絶對化から身を護らうとすることこそ現代の一徵表に外ならぬと著者はいふ。著者が所謂「北方人種」に固有な生來の性格價値として力説する魂の自由或は人格的自由にしても、著者によれば北方人種が生み出した特有な類型の中でこそ初めて

可能であつたもので、感能的な南方地中海人種や近東人種の與り知らざる所であるわけだ。特にこの人格的自由とは常に形態化するところの形成作用を意味せねばならないが、形態とは常に彫塑的に制限されたもので、この制限作用の中にこそ人種的制約は遺憾なく現はれると著者はいふ。要之、著者によれば人格への要求と類型への要求とは根本に於ては結局同じものであるわけで、所謂文化史の取り上げる價值概念の史的推移もその樂屋裏で行はれてゐる深刻な人種鬭争を離れては全く意味がないことになる。

そう考へてみると所謂文化史的敘述にみる人類文化の段階的發展觀もその普遍的で且つ合法則的なものではなくなるわけで、確かに世界歴史の上に考證せられる劃時代的な思想的變遷は之を人種鬭争に伴ふ文化類型の鬭争として見た方が説明し易いことが多い。従つて又この著者の考へ方を押しつめてゆくと光輝ある文化の擔當者は滅びることはあつても新しく生まれるものではないわけで、自然象徴的な神話の形成に初まる特定の人種なり民族なりの魂といふものはその後様々の文化形態を遍歴してはゆくが、之を貫く類型は常に一つであり、この生來の類型を喪つたときにそれは世界史の舞臺から退場せねばならないことになる。希臘の衰退、羅馬の滅亡等世界史上に見る種々の非連續的現象も著者の立場からすれば當然の事實であるわけで、歴史解釋にか様な非連續性を承認し得るといふことに私はこの人種史觀の一つの特徴を認め得るのではないかと思ふ。と同時に文化の眞髓は何處までも支配人種の人種的支配とその運命を共にすべきものと考へる點に於てこの種史觀は所謂階級史觀とも截然と區別される特徴をもつてゐる。支配階級のみが文化の恩澤を享受して來たのは階級史觀の方からいへば生産力の發展が不充分でその社會主義的普遍化は却つてたゞ貧乏を

一般化する結果となつたであらうといふ一面の辯護論的理由さへ成り立つわけだが、階級鬭争が人種鬭争として行はるゝ限りこの種の人種史觀にはそのやうな一抹の辯護をさへ入るゝ餘地はないわけだ。況んや階級史觀が來るべき社會主義的革命は潤澤な生産力の基礎の上に少數者の占有物であつたブルジョア文化を全人類に享受せしめるのだと考へるとき、この理想は明白に文化の超人種的乃至は超民族的な解釋を前提してゐるとさへいへると思ふ。か様な文化概念と鋭く對照する所にローゼンベルグ流の人種史觀が提起する文化概念の著しい特徴があらうと思ふ。

要之、著者のいふ文化とは一派の論者の愛用する所謂「文化圏域」の考へに見る様な人種や民族とは無關係な抽象的事物ではない。それはもとく生きた血の自ら創造したもので、合理的に乃至は非合理的に夫々獨特の仕方で深い形而上的な根柢をもつてをり、捕捉し難い或る中心をもつてゐる。だからこそ又特定の文化價值體系はいつでも一箇の至上價值觀念を中心とした一種の有機的組織、或は寧ろ有機的生命をもつてゐるので、特定文化の擔つてゐる唯一最高の價值觀念とは特定人種に固有な其の魂の最高の表現であることになる。いひ換へれば凡ての人種はそれ／＼固有の唯一至上の價值を陶冶し育成してゐるわけで、獨特の育成組織を伴ふこの至上價值が異種の血液や觀念を多量に混入した結果他の育成組織によつて變質させられたり或は全く至高地位から追放されたりする様になると、それは内面的にも又外面的にも末期的な混沌状態を表はしてくる。尤もこの混亂の後には魂の力は再び又生來の凝集作用を發揮して新しい諸條件の下に又新しい存在形式を生み出すことになるが、併しこれは一時潛入した異種の價值に對する完全な勝利として行はれる場合もあれば、又分裂した二つの中心點を餘儀なく耐へ忍んでゐるといふ場合もある。がか様な第二の或はな

ほ多數の異系の世界觀が空間的に又時間的に竝存してゐるといふことは破壊の萌芽を内藏してゐる不吉な妥協状態で、侵入してきた文化體制が舊觀念への信憑を弱め其の擔ひ手である人種と民族とを物理的にも亦破壊し征服するのに成功するとき、それは一つの文化の魂の死滅を意味し、延いてはその外的體現者たる人種と民族とをも地上から消して了ふことになるといふのが著者ローゼンベルグが世界歴史の中に證明しようとする人種（或は民族）文化觀の原則でもあり又公式でもあるわけだ。

二

では著者の所謂北方人種、特にその現代に於ける唯一の代表者であるといふ獨逸ゲルマン人種を性格づける唯一至高の價値とは何であるかといふと、北方人種に固有な眞の內的（人格的）自由を基礎として初めて成立する名譽と義務の觀念こそ之に該當するもので、著者によると總じて北方人種が國家を形成し文化を創造した所には必ず認めらるゝ所のものであり、それは人種的民族の或は文化的解體の時代に必ず主役を務めてゐる價値概念、即ち愛と同情とのそれに酷しく對立する所のものである。著者が以て北歐的精神の眞髓をなすといふ內的、人格的自由とはカントの二世界觀の中に最高の表現を得た當のものであり、更に遡つては中世の神祕哲學者エッゲハルトの魂の哲學の中に不拔の明證をもつてゐる自ら信ずるところの篤い人間精神の高邁な自覺をいふ。それは世界觀としては唯物論的たると唯心論的たるを問はず總じて獨斷的な一元論に對して凡ての現象の對極性を肯定することを意味し、隨つて又一方には自然の機械的必然性を究明すると同時に他方には人間精神の自由を確信することを意味する。至上價値として他に俟つところのない名譽の觀念はか様な自由を基として成立するわけで、その盛衰を世界史の上に考證するのが著者の人種史觀といふべ

きものの目的であり、兼ねて又光輝ある文化は悉く北方人種の形成したものであるといふ所謂北方人種優越思想の間接の證明でもあるわけである。

三

世界史上に於ける北方人種の最初の華々しい登場は北歐の故郷からはるばる古代印度へまで侵入してきたインドゲルマンの大移住であるが、印度の族姓制度とは著者によればアリアン人種の支配と共に初まるもので、族姓とはもと Varṇa 即ち「色」を意味し人種的差別に基くものだといふ。ブラーマン思想を中心とした最古の神話時代の後一時低級な魔術的魅力に耽溺した時代がくるが、その後登場するアートマン思想を核心とした所謂印度哲學の完成は著者によれば思想そのものの發展としては絶対に説明し難く、唯アリアンの精神の蘇生としてのみ釋明し得るもので、心的自我の固有價値を説くこの思想が王侯の宮廷を中心に武士のカストから出てゐることは右の如き解釋を確證するに足ると著者はいふ。がその後のアリアンの人種的没落と混血とは印度哲學の生きた前提をなくしてしひ、その哲學思想は専ら觀念的な單に思想としての思想となる。己が魂を全宇宙に擴大し共鳴させた嘗てのアートマン思想は單に自我のみをみつめる逃避的な態度にまで去勢され、自然は實在性のない一種の惡夢の如きものと考へられてくる。アートマンはその人格的基礎を養ひ、宇宙的心靈の無形態的な全一觀が完成される。著者によれば之こそ人種的混血の齎した當然の歸結で、著者の文化史觀の最も古典的な例證ともなるわけである。

また同じインドゲルマンの大移動はイランの地にアリアン系ペルシャ人を蕃殖させたが、彼等は少數民族たる弱點を蔽ふ爲に人種保護策を講じ同族結婚を實行した。特に彼等は各地に散在せる爲にその結合を共通の世界觀の統一に求める必要があつたが、この要求に答へて出現したものを著

者が古代北方人種の生んだ最大の思想家なりとするツァラトストラで、陰陽二元の神の鬭争と光明神の最後の勝利を説くその思想は本著者にとつてはその結構に於て完全に北方的であり、その内容に於て人種鬭争の最強の武器でもあつたわけになるのだが、之らの史實を玩味するには本稿紹介者の史實は聊か頼りない。

轉じてヘラスの地に現はれた希臘人を見ると、こゝでも太古の英雄傳説は混血を許さなかつた貴族主義的な社會體制を回顧せしめるに充分で、その後の希臘神話も魔術的な要素を徹底も含まない。其の北方的態度の中に猶ほ人種的な純粹さと健全さとを物語つてゐる。が地上に漸く人種的混交の行はるに伴ひ神々の世界にも亦ペラスギア、フェニキア、アルプスの諸形像が、更に後にはシリアの觀念まで侵入してくることを著者はデメテル、ヘルメス、アレス、それからディオニソスの少くとも非アリアンの一面等非希臘的な神々の出現に指摘してをり、この點、母や夜や大地や死の觀念に古希臘的なものを見ようとする嘗ての獨逸浪漫派の解釋に斷乎として反對してゐる。凡ての母親たちを一人の母なる大地の分身として之を神聖不可侵のものとして考へ女を物質不壞の權化に祭り上げるのは著者によるとエトルリア人たちの思想で、總じてか様な母性尊重の慣習に對し希臘文化の眞髓は光と天の法則を主とし父の精神と意志とを重んずる所にこそあるといふ。いひ換へればこの兩者は著者にとつては所謂文化發展の段階の相異を示すものではなく、もとゞ文化そのものの固有の性格的善異であるわけだ。神々の世界に反照される此の人種混交の結末は希臘史上には傳承の貴族主義的社會體制が崩壞して民主主義跳躍の時代として現はれてくるもので、プラトンが『ゴルギアス』篇中カリクレスに語らせてゐる様に、自然の法則はより價值高きものがより價值低きものを支配することを

欲してゐるのにアテネの法律は最も才能あり力あるものを若くして獅子の如く捕へて了ひ平等の説教によつて誤り導いてゐるといつた状態となつてくる。この希臘のデモクラシーを著者は民衆の支配にあらずして希臘人に對する近東の支配に外ならぬと説いてゐるが著者の史觀からすれば、勿論そう解釋するのが當然で、たゞプラトンのイデア説のみが嘗て神話的に形態化されたものの哲學的認識として希臘文化の眞髓を傳へることになる。更に眼を羅馬に轉ずると茲でも古代ローマを建設したラチニ人は北方人種だ。而もこの古代ローマは近東の航海人種に包圍されて言はゞ全東洋主義に對抗して打ち建てられた眞の民族國家で、特にカルタゴの征服は著者によると人種史上、といふのは勿論北方人種と北方文化の保全の爲に特筆銘記すべき重大事件と謂ふべきもののだが、併しローマが更にユダヤ人の本據たる近東までをも征服したとき北方人種の選士としてのローマ人のこの世界制覇も既に手遅れで此の寄生民族は最早その地に居ず既にローマにも滔々として侵入してきてゐた。當時のローマ帝國では奴隸保護と婦人解放と貧民救済とが國策となり、父家長的家族制度の根幹はいよゝ弛緩するばかりとなつてくる。紀元後二一二年にはシリア系の母を有ちアフリカ人を父とするカラカラが混血兒として初めてケーザル位に即くといふ状態である。具眼者の度々の禁壓にも拘らずキリスト教がローマを征服したのも著者によれば當然の結果であつたわけで、人種的混血の隨伴現象である志操の無方向と内的な不安とこそがキリスト教的罪の意識の最も格好な温床であつたのだと著者はいふ。當時のキリスト教がプロレタリア的・虛無主義的な政治的思潮でもあつたことは定説ある所であるが、著者はローマのユダヤ人たちが著者の所謂「古代世界に於ける人種的混沌の擴大者」パウロに對しそのユダヤ教會を傳導用に解放した如き事實を擧げて當時の

キリスト教運動の本體を髣髴させようとしてゐる。そしてローマ自身が無限な世界帝國となるに伴ひキリスト教は民族なき世界市民の思想によつて之と完全に合體して了ふことになる。なほ著者はゲルマン人の北伊太利侵略が北方人種の血の再度の混入を齎し、後にルネッサンス運動が北伊太利に成立したと前後對照させてゐるが、文化の華咲くところ必ず北方人種と關係させねば氣が濟まぬといつた風情である。

四

面白いのは世界史を古代と中世とに分類する一般史家の時代區分に對して著者の提案する新説で、著者によると北方的であつた古代羅馬と新しいゲルマンの西洋との間に挟まれる時代はチェンバレンの所謂「民族混沌」の時代として一括されねばならないわけで、無制限な混血と凡ゆる病人の氾濫、過度の感覺的陶醉と誇大なシリア的迷信、それがこの時代を貫く特徴であると著者はいふ。

勿論正確に年代を決定し難いこの民族混沌時代に對するゲルマンの西洋の反抗運動は自由な、といふのは取りもなほさず北方人種に生來固有な考へ方を復活させた所謂異端者たちの登場を以て初まるわけで、その他書齋の中で進行した新しい自然科学的乃至は哲學的探究も亦之とその文化史的意義を同じくする。異端者たちの反抗運動は勿論その様な文化史的意義を自覺してゐたものではなく、時にはローマ教會を淨化するといふ子供らしい希望をさへ抱いてゐたとはいへ、著者によると之らの運動の凡ては皆教會の普遍主義に對する反抗運動で根本に於いては西洋的、民族的な心術の前提をなす性格價値の爲の巨大な闘争であることになる。この種異端者の反抗運動史上最初の光榮ある大闘争者は大量のワルツス教徒やユグノーを生んだフランスであつたが、その犠牲の最も深刻であつたのも亦このフラ

ンスで、かの大迫害と莫大な國外逃避とはフランスから眞に北方的な人口を消滅さして了つた。著者によるとフランス革命を生んだルソーやヴォルテールの哲學が明敏と機智には不足しないとはいへ眞の偉大な貴族的心性に全く缺けてゐるのも其の爲で、一七八九年七月十四日の事件こそこの貴族的心性の缺乏を證明して遺憾ない。民主主義の名に於て狡猾な三百代言者に國政を壟斷させ、ユダヤの銀行家たちの搾取にまかせ、才氣こそあれ結局は過去を食ひつぶしてゐる現代の佛蘭西は著者によるとこの人種的變質の最後の歸結であることになる。

ローマ教會の水平化運動に對する性格的反抗は獨逸に於てはルーテルを以て新時期を劃する。嘗てゲルマンの生み出したヴォータン傳説はその自然象徴的な形式でいつまでも繼承さるべきものでないのは勿論だが、さりとてその後繼者は何も剩へ地中海人種に特有な迷信を以て俗惡化したキリスト教である必要はなかつたわけで、そこにジューグフリード傳説にも見る獨逸人の「寛大」の犠牲があつたと著者はいふ。もとヴォータンの結婚式日であつた五月一日のワルプルギス夜の祭は全く東洋的な魑魅魍魎の跳梁するところとなつて了ふ。初期の騎士たちに、その後のハンザ同盟の闘士たちにゲルマンの名譽の守護者は認められるが、三十年戦争の悲劇が獨逸民族の性格を全く變質させて了つた結果については、佛蘭西に於けるユグノー戦役と全く同じい。その後の獨逸再建運動は大選舉侯とフリードリヒ大王に指導されたプロシヤの效績に歸すべきものだが、最近のマルキシズム運動は再び新しい姿で末期羅馬的思潮の暴威を繰り返したもので、一九一八年の事件は嘗て百五十年前に佛蘭西を支配するに到つた同じ人種が獨逸でも支配權を掌握したことを意味すると著者はいふ。「凡ゆる理想の中で一番馬鹿々々しいのは英雄のそれだ」と伯林ターゲブラットは公言する仕

末で廿世紀の神話どころの話ではない。

最後に露西亞について著者の關説するところを見る。此處でも生氣ある指導の行はれたのはハンザ同盟その他の獨逸からの移住者やドイツ系バルト人の賜であるが、此處に混入してゐるモンゴルの血は時に遊牧生活への回顧的な憧憬を爆發させる。ロシア文學に見られる様な性格的破産は著者によると人種混血に毒された種廢せる魂の好箇の例證で、ラスコルニコフやスメルジャコフやイワンの中には名譽の觀念、向上への氣魄の片鱗をさへ認め難い。西歐諸民族が途を喪つたら彼らに新しい救ひの途を示さうといふドストエフスキの全人類主義の思想が生活に疲れた西歐人に多大の共鳴者を得たのも著者から云へば西歐人自身の自ら招いた罪であるわけであり、現在のボルシェヴィズムに對しては著者は之を北方的文化形態に對するモンゴルの血の反逆であり、人格的根柢に對する遊牧民の憎しみに外ならぬとまで極言してゐる。

五

要之、世界歴史とは人種鬭争をその原動力とし名譽と愛の二つの觀念を夫々中核とする二種の價值體制の二千年來の鬭争として展開されてゐるわけ、理性も意志も常に必ずしも自ら意識してゐないが本來自然の理法に忠實であり血の氣の消えたものではなく有機的に制約されたものであるといふのが右史觀を貫く著者の根本信念であるわけだ。否寧ろ種の制約を受ければこそ人間精神は眞に創造的であり自由であり得るわけで、眞理とは論理的正誤を意味せず生來の類型的創造に有意義で自己本來の法則に隨順せるものをいふといふ眞理觀の上に立つてゐる。だからして世界觀的理性も、その擔ひ手が變り根柢が動搖してくると、その程度に應じて専ら悟性的な概念構成に硬化してしまひ、之に伴つて其の意志的側面も亦魔術的な

衝動に脱化して迷信に迷信を重ねる様な結果になる。實體なき主知主義と魔術とは著者によれば同一事象の兩側面で衝動的な人種混血の生む二者擇一的な結果を意味する。クラীগス流の原始人禮讚も、シュペングラー式の文化的厭世主義も、乃至はシュパンのカトリック臭い普遍主義も著者には無縁の思想で、獨逸哲學の古典的な傳統をなす健全な理性と意志との復興に著者は獨逸將來の運命、「廿世紀の神話」の建設を托してゐるともいへよう。

著者ローゼンベルグの史觀に對する批評は本紹介の範圍外に屬するが、論の當否は別として一つの新しい歴史解釋の立場を提供した效績は大きい。が階級史觀や人類史觀の如きこの種の西洋流の歴史解釋を見るにつけても我々日本人の立場として自省されることは我が國史が之らの史觀に説かれる様な極端な形をとることなしに殘されてゐること、階級的分化も人種的葛藤も一個の大和民族の發展途上に於ける諸契機としてローゼンベルグの所謂唯一至高の最高價值の育成組織の一環たる役目を働いてゐるといふこともできよう。西歐の歴史に見る様な觀念體系の抽象的な展開が行はれなかつた所以もここにあり得るのであらうが、それだけ思想は實際生活と緊密に結びついてゐたといへよう。たゞ近代に於ける自然科學的思考法と機械文明の輸入の必要は之に隨伴する皮相な文化觀念をも同時に吸収するの餘儀なきに到つたといへる。それだけ本著者の説く如き民族文化觀も我々にとつて他山の石として玩味すべきものが尠くないのではないかと思ふ。